

はじめに

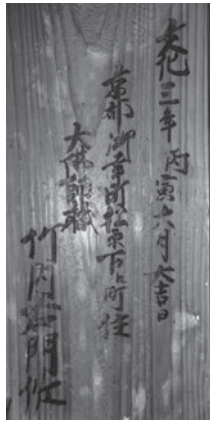
当館では二〇〇九年九月に歴史系企画展として「大浜てらまち」展を開催した。この展覧会は当館も位置する大浜地区において「てらまち」を形成する寺院とその歴史を紹介したものであった。開催に先立っては各寺院の協力を得て什物・資料についての調査が行われたが、筆者もその調査に主として仏像分野の担当として参加し、展覧会図録に「大浜てらまちの仏像」と題した一文を寄せた¹。その後一部の像については本格的調査が行なわれ、市の指定文化財となった²ことは本展覧会の成果の一つとして記憶されよう。

この時の調査では他にもいくつかの興味深い事例が確認できた。林泉寺に所在する三体の祖師像が京都仏師・竹内右門の作例であることが判明したこともそのひとつである。展覧会ではこのうちの林泉寺開山・傳海良亨倚像³のみの展示であったが、本稿では改めてこれら三体の作例を紹介するとともに、同時代の資料や他の作例を参考にしながら、仏師竹内右門について考察を加えていきたい。

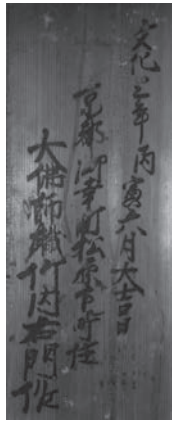
林泉寺・祖師三像

林泉寺は碧南市本郷町に位置する曹洞宗の寺院である。寺伝によればかつては天台宗であったが長禄元年（一四五七）曹洞宗に改め、傳海良亨を開山として招いたという。以来近世を通じて力を保ち、総持寺の輪番を

挿図1 林泉寺・道元像椅子天板裏墨書



挿図2 林泉寺・瑩山像椅子天板裏墨書



勤める住職も輩出した³⁾。また近代の文人画家として著名な富岡鉄斎が大浜に逗留した折に、林泉寺の茶室を画室として絵筆を執るなど⁴⁾、地域の文化的な中心でもあったことが知られる。

さて本稿で取り上げる祖師像三体系は、本堂の奥に位置する開山堂に安置されている。正面壇上中央に当寺開山の傳海良亨倚像（以下傳海像）^{後掲図版1}、向かつて右に曹洞宗の開祖である道元倚像（以下道元像）^{後掲図版2}、左に同じく曹洞宗の太祖瑩山紹瑾倚像（以下瑩山像）^{後掲図版3}が並ぶ。いずれも坐高五十五センチ前後の、等身よりやや小さめの像である。

傳海像は老年の相で、金欄の袈裟をまとい椅子に腰掛ける。右手で払子を持ち、左手は開いて膝上に伏せる。頭体別材製の寄木造で玉眼を施し、表面は厚く彩色が施されている。像底は全面に布貼し黒漆を塗る。現状両手首先が分離する。道元像は壮年の相、墨染めの袈裟をまとい椅子に腰掛ける。右手で払子の柄を握り、左手は手のひらを上に軽く握って払子の毛先を持つ。頭体別の寄木造で玉眼を施し、表面の彩色は厚い。像底の処理は傳海像と同様である。瑩山像は老年の風貌、傳海像と同じく金欄の袈裟をまとい椅子に腰掛ける。右手で払子の柄を、左手は人差し指を伸ばして手のひらを下にし、軽く握って払子の毛先を執る。頭体別の寄木造で玉眼、表面の彩色が厚いことは前二像と同様である。像底は本像のみが木地を現し、細かく材を寄せている様子が見てとれる。現状両手首先が分離する。どの像も表面の彩色に一部亀裂や浮きが見られ、瑩山像には首の部分などに付着物が見られるものの、保存状態はおおむね良好である。いずれも動きは少なく定形的な像であることは否めないが、傳海像、瑩山像の老相の二像などは、その表情に像主の個性を表そうという意識があるように思われる。

各像とも本体自体に銘の確認はできない。しかし道元像と瑩山像には付属する椅子の座面天板裏に墨書があり、ともに文化三年（一八〇六）六月、「京都御幸町松原下ル町」に住む「大佛師職 竹内右門」によつて造られた旨が記されている。各像とも大きさがほぼ同じであり、接合部に起因する彩色の亀裂や像底の様子から構造も類似していると判断されるため、銘のない傳海像についても竹内右門による同時の作と考えられる。

竹内右門についての記録

では竹内右門とはどのような仏師なのだろう。まずは同時代の京都の地誌や記録からその名を探っていくことにする。史料上に竹内右門の名が初めて出てくるのは、管見の限り、文化八年（一八一二）に刊行された『京羽二重大全』の仏師の項、「御幸町松原下ル町 竹内右門」の記載である。『京羽二重大全』とは、貞享二年（一六八五）に刊行された当時の京都の代表的な地誌のひとつ『京羽二重』の改訂版である。『京羽二重』には「諸職名匠」

という項の中に「大佛師」項が設けられており、二十六人の仏師の住所と名が載せられている。延享二年（一七四五）の大幅改訂により『京羽二重大全』となった後、明和五年（一七六八）、天明四年（一七八四）、文化八年と版を重ねていく。掲載される仏師の数は、延享版で二十三人、明和版で十六人、天明版で十五人、文化版では十人に減っている。竹内右門の名が現れるのはこの文化版であり、『京羽二重』系列の地誌中では、江戸時代後半になるにつれて仏師の数が減少していく中で、新たに表に出てきた仏師のように感じられる。その後、文久三年（一八六三）の『京羽津根』、同四年の『都商職街風聞』、明治十六年（一八八三）の『工商技術都の魁』、同十七年の『今世京羽二重』¹¹に、いずれも「京都御幸町松原下 竹内右門」として掲載されている。

これらは主に一般の人々が参照するために編まれた記録であるが、仏師側の様子を示す史料もある。『佛師職慎申堅メ控』がそれであり、文政四年（一八二一）に京都の仏師たちが造仏等の諸々の取り決めについて申し合わせを行った際の連判状の控えである。¹² 竹内右門は、文化版『京羽二重大全』に同じく記載されている赤尾法橋右京（運業）、林如水、田中浄慶らとともに名を連ね、押印している。彼の後には「以下連名略之」の記述があることから、ここに名を記している者は当時の仏師の世界においてそれなりの地位を占めていたように推察される。

世間での一般的な名声を示すと考えられる地誌への記載と、同業者内の連判状への署名などから、竹内右門は江戸時代後半から明治にかけて、京都の主要な町仏師のひとりとして知名度を保っていた様子がうかがえる。

『本朝大仏師正統系図并末流』

竹内右門が江戸時代後半から明治期にかけて活躍した仏師であることは、同時代の記録を参照することで確認できた。では次に竹内家側からの史料をみてみよう。

仏師竹内家についての重要な史料として知られているのが京都国立博物館本『本朝大仏師正統系図并末流』¹³（以下『正統系図』）である。仏師系図とは所持する仏師が自らの正当性、つまりは定朝から運慶を経て七条仏師へと連なる、伝統的仏師の系譜の末裔であることを主張するためのものであり、代々の大仏師の名と事績が記されている。現在複数本の存在が確認されているが、それぞれ伝来によって内容が異なっている。¹⁴ 『正統系図』もそのひとつであり、系図の特徴としては次の三点があげられる。

①定朝（一代）から運慶等の主要な仏師を経て、近世の伝統的仏師である七条仏師の康知（二十四代）まで

をつなぐ前半部はおおむね諸本と共通する。

②二十五代にあたる左京（了全）からは、了無、右京（了意）、数馬（了雲）、内蔵之亟（了勇）、蔵之亟（了慶）と「了」字を継ぐ仏師が続く。

③三十代の蔵之亟（了慶）は二代とも称しており、以降定覺、定慶、そして「竹内家五世」と記される賢慶まで続く。従って二十九代内蔵之亟（了勇）が竹内家の初代となったと考えられる。

ここで竹内家となつて以降の記載を確認していくと、初代内蔵之亟については事績が列挙されるのみで年代は記されない。蔵之亟は享保四年（一七一九）から延享二年（一七四五）、定覺は宝暦十二年（一七六二）から明和二年（一七六五）、定慶は明和七年から寛政元年（一七八九）の間の事績が記されている。五代賢慶の事績は記されていない。なお奥書には明治三十三年（一九〇〇）に八世の竹内右門が帝国京都博物館に『正統系図』を献品した旨が記されており、最終的に竹内家に伝来したものであることが分かる。

竹内右門の実作例

ここまで史料上に現れる竹内右門の例を挙げてきたが、近年各地での悉皆調査等の成果としてその実作例が報告されている。そこで管見に触れる限りの報告書等からその事績を拾い出し、年代順に並べると表1のようになる。

まず現在最も早い年代の作例となるのは明和七年（一七七〇）の常総市・真光院の開山天然晝孝像である。『正統系図』に照らせば、四代定慶の事績が記されるはじめの年の制作であり、『正統系図』上に本像造立についての記載はないものの、定慶の手になる可能性が極めて高い作例である。銘文は像本体内部に記されている。

続いて天明七年（一七八七）六月の銘がある門真市・黄梅寺の大権修理菩薩倚像及び達磨坐像。次いでその五ヶ月後の天明七年十一月の銘が残る東浦町・地藏院の子安地藏菩薩坐像、矜羯羅童子立像、制吒迦童子立像。矜羯羅童子像には銘文が確認されていないようだが、制吒迦童子像と同工の作であるのは間違いない。また銘文の年紀から制吒迦童子像と同年同月の制作である地藏菩薩像台座に記された「子安地藏三尊」が、懷に赤子を抱えたこの地藏菩薩像と、一般的には不動明王の脇侍として知られる制吒迦童子、矜羯羅童子による三尊形式の尊像と解することができる。¹⁵この三体は一具であるとしてよいであろう。

さらにこの地藏菩薩像の銘文中に、竹内右門に続いて「手傳」として「専之進」の名が記されていることは注



挿図3 黄梅寺・大権修理（右）、達磨像（左）
〔門真市史 別巻〕より転載）
椅子天板裏墨書

表1 竹内右門実作例¹⁶

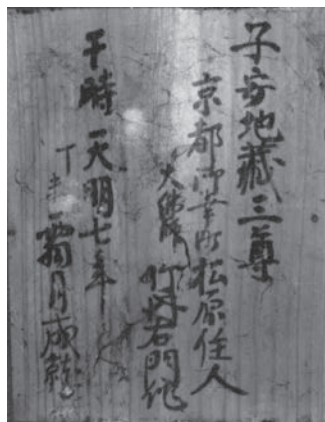
制作年	寺院（宗派）	作例、銘文等
明和七年八月 （一七七〇）	茨城県常総市 （旧水海道市） 真光院（曹洞宗）	開山天然暁孝坐像 像内面部墨書 「京都御幸町／竹内右門作／大仏師」 像内胸腹部墨書 「京都御幸町通／于時明和七年 松原下ル町住人／庚寅八月吉祥日 大仏師／竹内右門作／下総国飯沼笹塚新田／真光院御開山木像／新造」
天明七年六月 （一七八七）	大阪府門真市 黄梅寺（曹洞宗）	大権修理菩薩倚像、達磨坐像 椅子天板裏墨書（大権修理） 「天明七未六月吉祥日／平安御幸松原之南住／大佛師竹内右門作」 椅子天板裏墨書（達磨） 「天明七未六月吉祥日／平安御幸松原之下住／大佛師竹内右門作」
天明七年十一月 （一七八七）	愛知県知多郡東浦町 地藏院（曹洞宗）	子安地藏菩薩坐像・制吒迦童子立像・矜羯羅童子立像 台座裏墨書（子安地藏） 「子安地藏三尊／京都御幸町松原住 人／大佛師竹内右門作／于時天明七年／丁未霜月成就」 台座裏墨書（制吒迦童子） 「于時天明七歳／丁未十一月吉祥日／六親菩提／京都御幸町松原下乃町／大佛師竹内右門作 ／同専之進／手傳」

寛政二年十月 (二七九〇)	京都府舞鶴市 圓隆寺(真言宗)	阿弥陀如来像・薬師如来坐像・釈迦如来坐像修復 像内背面墨書(薬師) 「寛政貳年／庚戌十月大吉祥日／恵信御作薬師如来御再興／新造台座後光奉彫刻／京都御幸 町松原下ル町住／大佛師竹内右門／康海／同苗専之進／丸幸」 ※『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇5』によれば釈迦如来坐像にも同様の修理銘が あるという。
寛政九年七月以降 (一七九八)	愛知県知多郡阿久比町 興昌寺(曹洞宗)	釈迦如来坐像 仕様書署名 「寛政九年／丙七月四日／京都御幸町松原下ル町／大仏師／竹内右門 印」 ¹⁸
文化三年六月 (一八〇六)	愛知県碧南市 林泉寺(曹洞宗)	開山傳海良亨倚像・道元倚像・瑩山紹瑾倚像 椅子天板裏墨書(道元) 「文化三年丙寅六月大吉日／京都御幸町松原下ル町住／大佛師職／竹内右門作」 椅子天板裏墨書(瑩山紹瑾) 「文化三年丙寅六月大吉日／京都御幸町松原下ル町住／大佛師職竹内右門作」
天保十年 (一八三九)	福岡県福岡市 東長寺(真言宗)	地藏菩薩像(賢慶・左衛門)
天保十三年 (一八四二)	福岡県福岡市 東長寺(真言宗)	弘法大師像修復
天保十五年 (一八四四)	福岡県福岡市 東長寺(真言宗)	町人像(賢慶・左衛門)
弘化四年 (一八四七)	奈良県奈良市 三松寺(曹洞宗)	観音菩薩像

挿図4

地藏院・子安地藏菩薩像台座板裏墨書

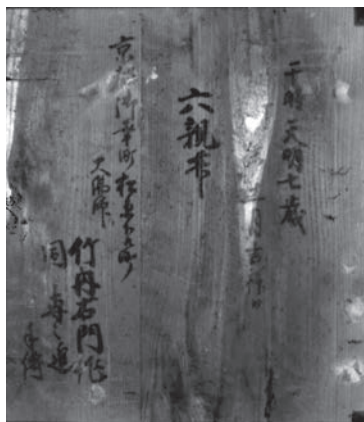
(写真提供 東浦町郷土資料館)



挿図5

地藏院・制吒迦童子像台座板裏墨書

(写真提供 東浦町郷土資料館)



目される。これは次の事績、寛政二年（一七九〇）十月の修理銘に出てくる人物の内のひとりである。従って地藏院と圓隆寺の事績は同じ代の竹内右門であることが推定でき、また地藏院と同年の制作である黄梅寺の事績もこれに加えることが出来よう。人物としては天明七年という地藏院、黄梅寺での制作年が、『正統系図』の竹内家四代定慶の事績年代に含まれていることから、これら三件の制作・修理にあたった竹内右門は定慶と見ていいだろう。なお、黄梅寺像と地藏院像の墨書の筆跡は明らかに異なるが、これは工房制作の体制をとっていることにより、必ずしも同一人物が記しているわけではないと解するべきだろう。

阿久比町・興昌寺の釈迦如来坐像は、本体あるいはその付属物に銘文があるかは不明であるが、『阿久比町誌資料編七』によれば本尊及び天蓋の仕様書と注文書が伝わっているようだ。ここではその内容に詳しく触れる余裕はないが、仕様書を記したのは竹内右門で、尊像の大きさとそれにあわせた台座、光背の寸法、金額のパターンを複数提示するなど、当時の注文主と仏師との関係を考える上で興味深い内容となっている。仕様冒頭に「花嚴釋迦如来唐様」とあり、いわゆる宝冠の釈迦である本尊像の姿と一致しているため、仕様書に記された寛政九年（一七九八）七月頃の制作と見ておいて問題ないであろう。なお『正統系図』では四代定慶の事績が寛政元年までであり、五代にあたる賢慶の事績は記されていない。そのため本像における竹内右門がどちらの人物にあたるかは即断できない。

次が碧南市・林泉寺の祖師像で、制作年は文化三年（一八〇六）である。四代か五代か特定できないのは興昌寺像と同様だが、年代からみれば五代目の賢慶、あるいはそれ以降の代の可能性が高いように思われる。銘記の内容を見ると、これ以前は肩書きを「大佛師」としているが、本像の銘には「大佛師職」と記していることも興味深い。ある時点で正式な仏師職をいずれかの宗派の本山より賜ったのだろうか。そうであるならば曹洞宗の可能性が高いと思われる。あるいはこの「職」字の有無に署名者の意識の違いを認め、興昌寺と林泉寺での事績の間に代替わりを想定することも出来るかもしれないが、これは現段階では判断としない。今後の作例報告の積み重ねによって判明することを期待したい。

なおこれ以降の四件については五代賢慶の事績と思われるが、詳細な資料を持ち合わせていないため紹介のみにとどめておくことにする。¹⁹⁾

曹洞宗との繋がり

さて、江戸時代も半ばを過ぎると大規模な造寺造仏の動きは少なくなり、また、制作できる仏像自体の大きさに制限がつけられるなど、仏師の活動にとって不利な状況が起きてくる。そのような中で一部の仏師は宗派と結びつき本山御用仏師として造像の需要を確保していたと考えられている。²⁰ 竹内右門についても『正統系図』や実作例を確認することで、本山御用仏師に近い関係を持つ宗派が想定できるように思われる。それは曹洞宗である。竹内右門と曹洞宗の関係については既に指摘されているが、あらためて先の表で実作例を眺めると、圓隆寺、東長寺以外は曹洞宗の寺院であり、その割合の多さには目を引かれる。

ただし他宗派での造像・修理事績があることには注意する必要があるだろう。また先に見た文化八年版『京羽二重大全』には「東本願寺仏師 樋口播磨」「西本願寺仏師 渡辺光雲」²²として本山御用仏師にはその肩書が付されているが、同時に掲載されている竹内右門には肩書がされていない。こういった点からは制度上の正式な本山御用仏師ではなかったようにも思われるが、町仏師と宗派との結びつき方を考えていく上で興味深い。

ここであらためて『正統系図』の上で注目したいのが、大権（修理菩薩）、達磨、道元といった曹洞宗寺院に特有の像に関する事績が目立つことである。竹内家五代に限ってもかなりの割合を占めるこれらの造像修復事績をさらに遡っていくと、二十六代にあたる了無の事績、「寛文中二曹洞本山永平寺之佛殿古佛之三尊諸堂佛像開山道元禪師像修復」「寛文十一年曹洞出世本山能州惣持寺諸堂佛像開山二代之御影修復」へと行き着く。この了無は延宝六年（一六七八）の地誌『京雀跡追』に「寺町二條下ル町／仏の上手法橋了無」と記されて以降、『京羽二重』そして延享二年（一七四五）版『京羽二重大全』へと掲載され続けた仏師である。伝統的仏師としての権威のあつた七条仏師から直接分家したと推測され、地誌の仏師紹介にあえて「仏の上手」と記されることから、著名な仏師であつたことが推察できる。『京羽二重大全』の次の版、明和五年（一七六八）版以降はその名が見られなくなる。もちろん寛文年間（一六六〇・一六七二）から明和五年（一七六八）までは約百年あり、地誌に現れる了無は一人ではなく代々の「了無」である可能性が高い。ただしそれが『正統系図』にみられる右京（了意）、数馬（了雲）らにあたるかは不明である。

竹内家の側から見ても、初代、二代にあたる二人は法名として「了」の字を冠しており、二代藏之亟については三十代とも併記されているため「了」字仏師と竹内家との正確な関係は判然としない。血縁関係のない弟子が分家したものと解するのが無難だろうか。ところで『京羽二重大全』から了無が姿を消す明和年間、竹内右門の名が記された作例が現れる時期でもある。まさにこの頃に竹内右門が了無の元を独立し、活動を始めたのではないかと想像したくなる。これもまた今後の作例報告をまつて検討していきたい。それはともかくとして、寛文年

間の了無による永平寺、能登総持寺での仕事が、『正統系図』系統の仏師と曹洞宗とを結びつける契機であったことは想像に難くない。そして竹内家はこの「了」字系統の仏師が築いていた依頼先との関係もろとも、その系譜を譲り受けたということであろう。

この曹洞宗との関係を前提とすれば、この系統の仏師の特徴として言及されている東北・北陸地方での造像事績の多さについても理解しやすい。というのも、北陸地方は先にも触れた曹洞宗の大本山永平寺（福井）と能登総持寺（現在は横浜に移転）のお膝元であり、東北地方は禅宗系宗派の比率が高い地域であることが指摘できるからである。曹洞宗との深いつながりを生かし、他の京都町仏師と競合しにくいこの地域を一つの縄張りとして需要を確保していたと言えるのではないだろうか。

おわりに

以上碧南市で確認された作例をきっかけに、同時代の資料、『正統系図』の事績、そして各地で報告された実作例を眺めながら、京都仏師・竹内右門について述べてきた。永平寺大仏師職、あるいは総持寺大仏師職というような、いわゆる本山御用仏師という正式な職に就いていたのか、その確証は得られていない。けれども江戸時代の後半、記される仏師の数が減少していく中で表に現れ、明治の後半まで仏師としての命脈を保ったのも、この曹洞宗との繋がりがあればこのように思われる。その実作例はまだ少ないものの、竹内右門はその仕事に際して、名前、制作（修復）年を書き残すことが多いため、各地で悉皆的な調査が進められていけば、今後確実にその実作例の報告は増えていくと思われる。それに伴って、その仏師像も次第に明らかになっていくことだろう。今後とも注目していきたい仏師であり、本文中で今後の課題としてあげた了無からの独立の時期、竹内家内での代替わりの時期の特定に加え、様式面からの編年の試みも今後の課題としておきたい。

(註)

- 1 『大浜てらまち』(碧南市教育委員会文化財課 二〇〇九年) 六〇―六三頁。
- 2 「大浜てらまち」展で紹介された像のうち、西方寺の阿弥陀如来立像及び蓮如坐像、宝珠寺の阿弥陀如来坐像の三体が平成二十二年(二〇一〇)四月一日付けで市の文化財指定を受けた。
- 3 『碧南の寺院 念佛の風土』(私家版 一九八八年) 六二頁。
- 4 正宗得三郎『富岡鉄斎』(錦城出版社 一九四二年)によると鉄斎の大浜への逗留は明治二十二年(一八八九)と明治二十八年(一八九五)のことである。なお同書には正宗が描いた林泉寺茶室のカットも載っているが、この茶室は現存しない。
- 5 三像の坐高と像高(センチメートル)は次のとおり。

傳海像	坐高五四・五	像高八〇・〇
道元像	坐高五四・五	像高八〇・三
瑩山像	坐高五五・〇	像高八〇・五
- 6 瑩山像のみ像底が木地を呈し、また背部の曲線の具合が他の二像とやや異なることは少し気にかかる。また三体の内二体にしか銘が確認できず、各銘文に像主名が記されていないため、像と銘文の間に取り違えがある可能性は否定できない。ただし全体の像容はいずれも良く似ており同一作者(工房)の同時の作とすることに現段階では問題ないと判断する。
- 7 京都大学文学研究科図書館本を参照した。
- 8 本書はその後元治元年(一八六四)、慶応三年(一八六七)、明治四年(一八七二)と改訂されるが仏師数や内容に大きな変化はなく、竹内右門も全てに掲載されている。なお文久版・元治版は京大文学研究科図書館本を、慶応版・明治版は京都府立総合資料館本を参照した。
- 9 『新撰京都叢書 第八卷』(臨川書店 一九八七)所収のものを参照した。

- 10 『新撰京都叢書 第六卷』（臨川書店 一九八五）所収のものを参照した。
- 11 京都府立総合資料館本を参照した。
- 12 『佛師職慎申堅メ控』の全文及びその内容については、三山進『佛師職慎申堅メ控』と京都仏師林如水（『鎌倉』第七十八号 鎌倉文化研究会 一九九五年）を参照した。
- 13 『本朝大仏師正統系図并未流』については『東洋美術』（特輯日本美術史一〇 一九三三年）に翻刻が掲載されており、また『仏を刻む―近世の祈りと造形―』（堺市博物館 一九九七年）七〇頁に一部が図版で紹介されている。
- 14 仏師系図については註13前掲書『仏を刻む―近世の祈りと造形―』七〇頁の解説を参考とした。
- 15 田中義恭・星山晋也『目でみる仏像事典』（東京美術 二〇〇〇年）二二七頁。なおこの形式の三尊における矜羯羅童子、制吒迦童子はそれぞれ掌善童子、掌悪童子と呼ばれることもある。
- 16 本表の作成には次の資料を参考にした。
 - 『水海道の仏像 水海道市仏像彫刻悉皆調査報告書』（水海道市教育委員会 二〇〇三年）
 - 『門真市史 別巻』（門真市 二〇〇三）
 - 『東浦町郷土資料館調査報告第一集 東浦の仏像』（東浦町教育委員会 二〇〇〇年）
 - 『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇5』（中央公論美術出版 一九七〇年）
 - 奈良国立文化財研究所編『日本美術院彫刻等修理報告Ⅶ』（同朋舎 一九八〇年）
 - 『阿久比町誌 資料編七』（阿久比町 一九九四年）
 - 『大浜てらまち』（註1参照）
 - 『仏を刻む―近世の祈りと造形―』（註13参照）
- 17 参照した註16前掲書『東浦の仏像』では「専之丞」とされているが、今回東浦町郷土資料館の協力を得てあらためて調査時の写真を確認し、「専之進」と読む方が妥当であると判断した。
- 18 仕様書の全文は註16前掲書『阿久比町誌 資料編七』に翻刻されている。
- 19 註13前掲書『仏を刻む―近世の祈りと造形―』一一〇頁。
- 20 張洋一「仏を刻む―仏師からみた近世の造形」（註13前掲書『仏を刻む―近世の祈りと造形―』所収 八三頁）。
- 21 山本勉「総説 水海道の仏像彫刻」（註16前掲書『水海道の仏像 水海道市仏像彫刻悉皆調査報告書』所収 五六頁）

22 東西本願寺の本山仏師については、張洋一「康雲銘の阿弥陀如来立像について―浄土真宗寺院の歴史的側面―」（『仏教芸術』二〇一一年九二年）、松田誠一郎「真宗寺院の木仏本尊」（註16前掲書『門真市史別巻』）に詳しい。なお『京羽二重大全』の文化版以前の版には、肩書のある仏師として「知積院仏師 福岡主水」も掲載されている。

23 『佛師職慎申堅々控』に関係して少し触れた仏師・林如水は、日蓮宗と結びついた仏師として知られているが、本書では彼についても本山御用を意味する肩書は付していない。

24 野間光辰編『新修京都叢書』第一巻（臨川書店 一九六七年）所収のものを参照した。

25 註13前掲書『仏を刻む―近世の祈りと造形―』一〇八頁。

26 註13前掲書『仏を刻む―近世の祈りと造形―』七〇頁及び一〇八頁。

27 小田匡保「日本における仏教諸宗派の分布―仏教地域区分図作成の試み―」（『駒澤地理No.39』駒澤大学文学部地理学教室 二〇〇三年）

図版1 傳海良亨倚像 林泉寺蔵



像底

図版2 道元倚像 林泉寺蔵



像底

図版3 瑩山紹瑾倚像 林泉寺蔵



像底